

京鹿子

全卷四册 本卷为十四卷之三
ISSN 1000-0001 (国内) ISSN 1000-0002 (国外)

7月号

夏季吟旅特集号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その八十二



葉ざくらや旅商ひの荷を解く
葉桜の中に光の万華鏡
葉桜の二つの影や解けだす
八十八夜ラストピースを嵌めてみる
緑蔭の猫の利き耳蕩げだす
死の宿の終の可惜夜火取虫

接ぎ接ぎの夢をつないで墓の恋
潜み音の守宮の夜や二重窓
はんざきのゑくぼ一つも石と化す
補聴器に憂き音を拾ふ河鹿笛
夕端居二つの影に黙一つ
ロボットの薄暑の部屋を丸く掃く
新緑の里曲の空の和みだす
茅葺のベロ藍の空梅雨の月

—近詠—

和田 照海

八重渦

七橋の一橋よりの花蜜柑
とびしまの八重渦ばかり五月風
句碑岬青葉明かりを顔に
野風呂崎魚島時のうしほの香
潮騒のかたちに燃ゆる夜光虫



—
近詠
—

松本
鷹根

老鶯

花棟師と言ふ風に淡く載る

涼しさを鯉の眼で確かめる

蝸牛誰れもが過去を語りたし

瀬は眩しただ青鷺の立ち続く

老鶯や梢和らぎ雨後の風



—近詠—

塩貝 朱千

花の菩薩

桜東風婆娑羅と大樹揺らしゆく
咲き満ちてむらさき匂ふ門院桜
灯なき花の菩薩に近づきぬ
花の風煩惱ひとつ捨て惜しむ
鳥影の落ちゆく迅さ夕桜



英華採集

旧暦の風やはらかし桃節句

和歌山 宇田篤子

明治六年から太陽暦（新暦）が採用されるまでは太陰暦（旧暦）であり歳時記の季語の多くに旧暦としての説明が付されている。ところが、掲句の季語・桃の節句は、三月三日とあり殆どの場所での日に様々な行事が催されている。しかし、地方では旧暦で行う場合もある。桃の季節を考えると三月三日はまだ早くその時に感じる風は、柔らかに優しく感じるのであろう。「旧暦の風」という措辞に表現の妙があり季語と響き合う。

地球儀をまはせば歪み冴返る

京都 岩佐英子

二ヶ月続けて「地球儀」の句をいただが、今の露西亞（ロシア）と烏克蘭（ウクライナ）の関係は政治的な思惑の絡み合いに留まらず、悲惨な現状が報道される分それだけ皆さんの関心度が高い表われ、となっているのであろう。地球は、元来丸く青い星である筈であるが、地球儀を廻してみても初めて気付くその歪みのひどに愕然たる思いを抱いている作者の胸の内は、多くの人が共感するものである。一日でも早い平和が来ることを望みたい。

人に性善説薔薇に棘のあり

福山 村上禎女

性善説は、中国の儒家・孟子が唱えたもので「人は本来、善であって努力を続けることで立派な人間になれる」という教え。「人は善であるから余り規制しない方よい」とする解釈は間違いらしい。では、「薔薇に棘がある」のは何故か？一説には、薔薇が高価な花であるため裕福な人の間に広まった、とのことで棘のある薔薇が必然的に存続したものの。この必然を努力する人間が報われる性善説との取合せには、納得ゆくものがある。

神麓集

百日紅 沼田巴字

人はいざ極楽境や百日紅
芸術の学校なれやカンナ燃ゆ
己れ消すまでに遊べりあめんぼう
欲得も何もなきなり蟬時雨
花莫蔭にゆつくりと寝る余生かな

若葉風 植村蘇星

菜の花に触れて減速ローカル車
相応に時にはをしやれ木の芽風
十八歳 弥栄 百歳 若葉風
常套も時には変革木の芽和へ
献血の終り頬笑みみどり風

九十四歳誕生日 北川孝子

ひらめきや夏めく朝の紅生姜
窓開けて齡いとしみ初ひばり
立志のこと親子で語り柏餅
かみしむる奥歯のなれり夏霞
一人暮し忘れて青菜の荒きざみ

白魚 直江裕子

一瞬の椿のためらひ見てしまふ
根三つ葉の青の滴り溢れしむ
遠国の母を見る目で桜見る
出来るなら白魚にしてと電話口
下萌や駆け出しさうな靴干さる

神麓集

新若布 高木晶子

終止符を打たぬ落花の中にゐる
花冷の尖つた魚もてあます
最初から間違つてゐた土筆摘み
白魚の枴で売らるるうすなさけ
新若布上着一枚色変る

蒼空に 伊藤希眸

花散るやう指揮者狂れゆくフーガ
妖精の先導土堤のさくら草
日を辿る漂鳥の騒沼は午後
手をかざし渡つてみたい春の虹
蒼空に蒼波の打つ島は初夏

東の間 奥田筆子

東の間の表面張力紫木蓮
リール犬春の自由を感違ひ
をさな兒に地面の近し犬ふぐり
春蟬やしぼりきれないマヨネーズ
頬杖の杖をはづせば春の月

うしろすがた 井上菜摘子

紫陽花やうしろすがたが好きで逢ふ
逢うてきて波の音する日傘かな
時計回りのひとと逆行昼顔咲く
十七音のむくろばかりや西日濃し
箱庭に一番星が灯りたる

神麓集

「花見絵図」

村田あを衣

おぼろ夜の墨の香ほのと返し文
花洛忌や拾ひし小石ふところに
醍醐路の途中はくれんほぐれをり
初蝶のいちぬけて来る勅使門
「花見絵図」 太閤居はす花醍醐

春寒し 山中志津子

スカーフをいちまい足せば春衣
ここからは限界集落蛇よぎる
弥生また越ゆる堰かも骨を病み
師弟また幾世のちぎり海道忌
春寒し戦火の中に生るる子に

太平洋横断

井尻妙子

たつぷりの嬰の泣きごゑ夏に入る
長文のメール効きすぎる冷房
走つてはならぬ限界梅雨長し
太平洋横断おぼろ夜の枕
学舎よりとび出す音符薔薇の午後

茅花照る 鷺山珀眉

春惜しむ香炉を包む萌黄布
吹くからに白砂の破目さくら蕊
麦青む脚立に光るヘルメット
浮雲は天才詩人茅花照る
巻き返す古戦場へと青嵐

春装 亀井福恵

春装に代へて齡を軽くする
春北斗泪のわけを封印す
一服の景にこよなく梅真白
すれちがふ顔も綻ぶ夕桜
陽と水のにほひを纏ひ落の臺

魔女 西村白杼

ふらここを蹴りては雲を走らせる
病室の母のほほ笑み夕おぼろ
枝垂れ桜ひよいと魔女の手招きす
未だ地球戦の火あり野火猛る
白雲にとけ込む鷺の春かすみ

ローズマリー 菊池和子

そよ風の旋律しだれ桜にのせ
花や花どこかに出口あったはず
花に溶けとけて花にもある憂ひ
青楓風に合はせる息遣ひ
虻翅音わたしここよとローズマリー

佐保姫 安田優歌

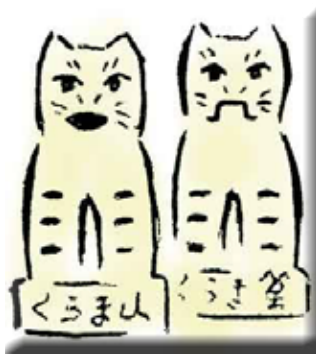
佐保姫や甘樫丘に雲ひとつ
仏唇にくれなる灰と陽炎へる
春愁を溶かす独りのミルクティ
花冷えの一灯重し窓曇る
亀鳴くやかメのやうに歩むわたし

春障子 本郷 公子

鳥帰る古城の絵地図立ち上がる
夕さりの竹の葉ずれや春障子
遅日光空へお手玉三つ四つ
ヨーグルト・トースト・サラダ・薔薇の朝
蝶の昼数字まばらな時刻表

棕櫚の花 石原 孝人

畦塗りて昨日を明日へ繋ぎけり
灯明に仏像の笑み堂おぼろ
廃屋は明治の木組み棕櫚の花
夏つばめ深き庇の峡の家
アルプスを沈めてあをし夏の湖





京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

蝶の昼ことりと家人戻りたる

初蝶や軽やかに行く旅靴

よきひとと共に老いゆく花の風

あざやかにさばく釣果の桜鯛

窓いつばい芽吹く街路樹齒科の椅子

岡山 佐藤 千恵

旧暦の風やはらかし桃節句

花冷のふれ合ひし手の安否かな

誰か来る予感うぐひす餅その他

理不尽のいくさ心頭凍返る

先んづる言葉を制す芦の角

地球儀をまはせば歪み冴返る

春が来るお地藏さまへご挨拶

白寿の恩師CDの花だより

歩を止める白梅の香や散歩道

ひと雨に胡瓜のつるの模索中

人に性善薔薇に棘のあり

春雷やひとり居の背に遺影の目

地虫出づすぢかぬ自肅の中の好奇心

花冷や筋鉄門すぢかぬの錆び乳鋳

和歌山 宇田 篤子

京都 岩佐 英子

福山 村上 禎女



夏季吟旅特別吟

鈴鹿呂仁

広島（野風呂岬・御手洗・大山祇神社）

万緑のとびしまむ切る夏つばめ

とびしまの七つの空や夏岬

新緑の岬に憩ふ野風呂句碑

夕風の潮を引き寄せ遊女墓

駆け足のガイドの誤算島薄著
雨乞いの楠へ青葉の光り満つ
子燕や渡船のつなぐ島訛り
子燕の探る潮目や島育ち
瀬戸の海霧あまたの磯をつなぎをり
夢つなぐ遙か来島大夕焼